

研究代表者 所属・職：全学教育センター・助教

氏 名：高村 秀史

研究課題名：美浜町における災害発生時の災害支援拠点、避難所生活に向けた支援

—アウトドアのノウハウを活かした体験型『防災・減災キャンププログラム』の構築—

### 研究の目的

災害被災時においては、アウトドア（野外活動）では必須とされる、「衣」「食」「住」に関わる技術や用具などが大いに役に立つと考えられる。本研究では、アウトドアのノウハウを活かし、避難所としての利用が想定される施設（日本福祉大学美浜キャンパスと美浜町総合体育館）を中心に、広く避難生活時に有用な知識や意識を得ることのできる、体験型『防災キャンププログラム』の構築、実践、評価を行う。

### プロジェクト目標の達成状況・成果内容

- ①『衣』『食』『住』『火』で必要な知識を楽しみながら学習・体験できるプログラムの開発と実践
  - ・多様なニーズに対応するため、試行的にファミリー（8月）、潜在看護師（10月）、学生（デイキャンプ10月、宿泊11月）を対象に防災キャンプを開催し、プログラムの策定をおこなった。
  - ・現在の防災・減災活動の動向を学ぶため、美浜町建設業者防災安全協議会（11月）、愛知県青少年防災キャンプ事例発表会（1月）、防災関連講演（2月）に参加し、知見を得た。
- ②災害支援ボランティア研修の実施
  - ・大学キャンパスが避難所になった場合、リーダーとして行動できる知識を得るため、本学学生とともに学内防災施設の確認、避難経路の確認等をおこなった。
- ③実践されたプログラムの点検、評価
  - ・防災キャンプの実践と調査から、より効果的なプログラム内容を検討した。
- ④プログラムの社会還元(冊子の作成)

- ・防災キャンプリフレットを作成し、知多半島内で配布。研究成果の社会還元をおこなった。

### 優れた成果があがった点

- ①現在の防災キャンププログラム傾向の判明
  - ・プログラム策定・展開にあたり、ニーズや動向の調査をおこなった結果、現在広く行われている防災キャンプの多くは「公助・共助力を高める目的」「アウトドアのノウハウに関してはあまり触れていないものが多い」等の傾向が判明した。本研究から得られた知見から「自助力を高める」「防災・減災に対する能動的な意識を持つ」ためのプログラムが渴望されていることが判明した。
- ②「やってみたい」を引き出すプログラムの策定
  - ・防災対策は「やらなければいけない」「人を助けるため」という感覚を持っている参加者が多かったが、プログラム参加後は「やってみたい」「自分がまず助かることが必要（自助力）」という感想が多く聞かれた。プログラムは概ね好評で、今後の方向性を得ることができた。

### 研究期間終了後の今後の展望

- ・知多半島は、地理的条件から災害発生時の救援活動開始が遅くなることが推察される。当初、美浜町のみでプログラムを展開する予定であった。しかし、潜在看護師研修への参加（東海市）、防災キャンプの開催（半田市、3月予定）などを通し、他地域でのニーズも多いことが判明した。今後、他地域においても地域性を考慮したプログラムの検討・展開を進める。
- ・現在、全国で広く行われている、いわゆる防災キャンプは「共助・公助」を目的としたプログ

ラムが多い。そこで、以下の内容を目的として引き続き研究を継続する。

- ①「自助力を高める」プログラムの策定・展開
- ②アウトドアの要素を多く取り入れ、「やらなきゃからやってみたいへ」をテーマに受動的意識か

ら能動的意識への転換を図る

今後は、本学学生・教職員の参画も得ながら、広く防災キャンプを実施できる体制づくりも重要な課題であるといえる。